

『里山資本主義(日本経済は「安心の原理」で動く)』(藻谷浩介、NHK 広島取材班、角川書店、2013 年)

下記のゴシック体は、谷口のコメント。数字は頁数。

47 エコストーブ、モミ殻ストーブ、「里山を食い物にする」

50 クレソン

57 光齢者(高齢者)、笑エネ(省エネ)、志民(市民)、志民税(市民税)

59 楽しくなれば定住してもらえる。

60 言い道具: エコストーブ

62 地方が元気でなかったら、最終的には都市も元気になりません。

65 オーストリア 人口 1 千万人未満、面積は北海道ぐらい、森林面積は日本の 15%で日本全国で 1 年間に生産するよりも多いぐらいの丸太生産量。

70 各家庭にペレットを運ぶタンクローリーから 2 本のホース、一つはペレット用、もうひとつは、灰用。

1 シーズン 5 トン、1 トン当たり 219 ユーロ(当時 13 万円)。

72 木を熱して出る炭化水素と酸素を混合させて燃焼させる。

74 ヴィントハーガー社の標準的ボイラーは、127 万円/2013 年。

76 外部への資源依存を断ち切ることで実現する里山資本主義

78 バイオマスの世界を突き進むことは、後の世代への責任だと言い切った。

81 森林マイスターの仕事は、資源量の管理

1. 1 年間に伐採する量の決定

2. 伐採区域の決定

3. 販売先の確保

82 手入れされることによって森は健康であり続ける。

87 持続可能性は、森林の持続可能性からはじまる。

88 オーストリアは、世界で珍しい「脱原発」を憲法に明記している。

90 『反核から脱原発へ ドイツとヨーロッパ諸国の選択』(2012 年、若尾祐司他、昭和堂)

91 ギュッシング市、人口 4,000 人、地域暖房、エネルギー自給率 72%。

95 化石燃料から木材に置き換えていく。地域経済の再生の切り札としてとらえた。

地域の外に支払っていたエネルギー代を試算。1990 年～2005 年の 10 年間で。

96 「100%再生可能へ！欧州のエネルギー自立地域」(滝川薫、学芸出版、2012 年)

105 CLT: コンクリート並みの強度を誇る

108 ロンドンには、なんと 9 階建て CLT ビル。グラーツ工科大学。

110 ミラノに 13 階建ての CLT 建築。

112 経済は必然的に国家中心から地域中心になっていく。

原料の調達も 200～300 キロ圏内

生産に多くの人手がかかり、投資が少なくてすむ一方、地域に多くの雇用が発生する。

森林は管理し育てれば無尽蔵にある資源だからです。

120 生きるのに必要なのは水と食料と燃料だ。

『木質バイオマスチップの完全燃焼技術』といった最先端の手段を付加することで、眠っている前近代からの資産は、一気に 21 世紀の資産として復活する。

121 「マネー資本主義」の経済システムの横に、こっそりと、お金に依存しないサブシステムを再こうちくしておこうという考えだ。

家庭菜園に井戸に雑木林に石油ストーブがあるだけで、まるで世界が変わる。

日ごろの縁と恩でつながった人間関係があるというだけで、いざというときにはかけがえのない助けになる。

「お金で買えるものは買えばいい、だがお金で買えないものも大事だ。」

129 全国レベルで見れば効率のいいシステムかもしれないが、地域レベルで見れば外へお金が出ていくだけの話だ。

全国レベルで見ればマネー経済が縮小したという現象なのだが、地域レベルで見れば、これ活性化以外の何物でもない。

132 集成材は、同じサイズの自然木はもちろん鋼材に比べても、曲げる力には強く、なん百年経っても腐敗しない。鋼材よりもはるかに軽いし、知られていないが防火性も高い。

136 地下資源から地上資源(=木)へのエネルギーシフト

137 日本では、②国にできないことを先に地方からやってしまうことが、コトを動かす秘訣なのだ。

マネー資本主義へのアンチテーゼ

141 ①「貨幣換算できない物々交換の」復権

144 ②規模の利益への抵抗

146 ③分業の原理への異議申し立て

151 都会の空気を畑にしてはどうか。

154 里山資本主義の実践は、人類が何万年も培ってきた身の回りの自然を生かす方法を受け継ぐということなのだ。

162 地域に利益が還元される形で物づくりを行う。